

《もてなし研究会》

日本庭園のもてなしデザイン

造園植治ディレクター 小川 勝章

1. はじめに

本来は宿泊施設の庭園にフォーカスを絞ってお話を進めさせて頂くべきなのであります。しかしながら今回は色々のご配慮を頂いて「日本庭園のもてなしデザイン」とのテーマを頂戴しました。少々緊張しつつも、このテーマを楽しませて頂く事とします。

このテーマには三つのワードが組み込まれています。日本庭園、もてなし、デザイン。(日本と庭園にも分けるべきなのかもしれませんが。)

ちょっと発想は硬いのですが、日本庭園、もてなし、デザインそれぞれについて掘り下げてみる事とします。

2. 日本庭園とは ～概念編～

では概念的に考えてみます。お庭って何であろう。

私は思います。「お庭とは自然への憧れを象徴化したもの」であると。

人は自然に対し憧れを抱きます。崇拜もします。恩恵も受けます。感謝もします。

自然。一言に自然といってもそれぞれの国、それぞれの地域によって異なります。それぞれの人によって感じ方も様々です。

日本にも独自の風土があり、そこで育まれる日本人の感性にも独自のものがあります。日本人の憧れた自然の姿がある訳です。

お庭。人はお庭の中において自然の面影を求めます。お庭の中で憧れの象徴を表現しようと試みます。

世界には多様なお庭があります。それぞれの国、それぞれの地域、それぞれの人。それぞれの自然への憧れがお庭の中で表現されます。

日本においても例外ではありません。

日本庭園或いは和風庭園という括りは極めて大雑把で曖昧なものではあります。ですが思い描く理想の自然、憧れる自然は日本のお庭の中において強く表現され、また象徴化されています。オリジナリティーに溢れています。

3. 日本庭園とは ～実際編～

しかしながら普段私が接しているお庭はそんな恐れ多いものではありません。もっと身近な存在です。

お庭って何であろう。おそらく答えは一つではないのでしょう。

「このお座敷からお庭を覗いてるととても心が落ち着く。」

「縁側でお庭を眺めていたらいつの間にか眠ってしまった。」

「何だか今日は樹々が笑っているなあ。」

「鳥達が騒いでいる。明日は雨だろうか。」

「雨の音が心までしっとりとした安らぎを与えてくれる。」

等といった素直な想い。人とお庭の間で授受されるダイレクトなやりとりが本来なのでしょう。

そんな気持ちにさせてくれるお庭がとても好きな私なのです。

4. おもてなしとは ～概念編～

「おもてなし」って素敵な響きの言葉です。

でも私の場合、イメージを先に重視し、何だか漠然と使ってしまうような言葉です。よって広辞苑さんにお伺いを立ててみました。

もてなしとは。偉大な広辞苑さん曰く「とりなし、たしなみ、あしらい、ご馳走。」なるほど。しかしながら少しドライな響きに変わってしまいました。

一方、私がイメージするおもてなしとは、「相手の方に慶んで頂こうとする事」であり、尚且つ「それによって自ら自身も慶べる事」であります。

お茶の世界においては、「亭主、客人双方が相手の心を推し量り、慶ぶところを見出そうとする。また双方がそれに応えようとする。」のです。

相手の心を気遣うという事は仕事に限らず、人が生きて行く上で当たり前の事です。その当たり前の事が出来るという事はとても素敵な事だと感じる訳です。これこそがおもてなしそのものではないのでしょうか。

5. おもてなしとは ～実際編～

ではお庭におけるおもてなしとは。

私は慶んで頂ける方のお顔を求めてお仕事をさせて頂きます。この方に慶んで頂きたい。ここからお庭を眺めて慶んで頂きたい。こんな風に安らいで頂きたい。楽しんで頂きたい。

理屈を抜きにしてもお慶び頂きたいと考えている訳です。

でも人に慶んで頂くには、お庭に慶んでもらわなければなりません。

怒ったお庭を目にして、慶んで頂ける訳がありませんから。

お庭に慶んでもらうには、お庭を構成しているそれぞれに慶んでもらわねばなりません。

石や水や樹木等それぞれが微笑んでいるのであれば、お庭全体も微笑んだものとなります。微笑んだお庭は人を包み込み、人にも素敵な微笑をもたらしてくれます。

例えば石。どんな大きな岩であろうとどんな細かな砂利であろうと、形成されるまでに費やされた時間は途方もないものです。とてもたくさんの物事、時間が凝縮されています。

その様な石。一つずつを注視してみると、石も穏やかな顔、険しい顔、のっぺりとした顔を持っています。それぞれの素敵な顔を如何に素敵に演出出来るかが私達の仕事です。

例えば水。穏やかな流れ、険しい流れ、遊んでいる様な流れ。同じ水を用いても様々な表現が可能な訳です。

例えば樹木。どんな樹木にも一番良い顔があります。そうです。樹木は皆、太陽に向かって笑った顔を見せています。皆、太陽がとても好きなわけです。

しかしながら最近は悲しい樹木をよく見かけます。公共事業用の樹木達です。公共事業は図面の上、紙の上で線を引かれ決められたものが全て正解となります。

よって樹木は高さ・幅・幹周といったものは数字で指定されてしまいます。結果公共事業用の樹木としてその条件に見合った規格品ばかりが養殖されて行く事となりました。

立派な大枝を誇った大木も公共事業用にその枝を落とされ、電柱の様な状態に仕立て直されています。

樹木の表情等お構いなしに、誰がどの様に植えても同じ状態になる。この様な無機質な状態が現在の主流となりつつあります。

人と同じです。それぞれの持ちうる最も素敵な個性をオリジナリティーを最も素敵に演出出来ればと考える最近です。

6. デザインとは ～概念編～

デザイン。設計、意匠。

やはりそれをいち早く感じ取り、最も認識出来るのは五感の中でも視覚なのでしょう。ではお庭においてその視覚、視線はどの様に誘導されているのでしょうか。

私達は庭園においてストーリーを構成し、創造していきます。ストーリーに基づいて人を誘導する。その際における格好の媒体となるのが視覚である訳です。

そのストーリーの組立ては様々であります。起承転結で表されるものもあれば、端的に結論を求めるものもあります。

先にも触れましたが、自然に対する憧れのスタイルが様々である為、ストーリーの表現も様々です。

例えば古来日本庭園のストーリーは陰陽五行説の思想に由来するものも多く見受けられますが、ニュージーランド等では色彩の変化によりストーリーを構成立てています。

ストーリーはその時々により変革する事もあり得ます。管理が行き届かずストーリーが途切れる事もあれば、歴史を積み重ね重厚なストーリーに書き加えられる事もあります。

ストーリー無き庭園、無きに等しい庭園も存在します。創り手が表現する情報にその本質がない場合、ストーリーを読みとろうとした鑑賞者は落胆若しくは混乱する事ともなりかねません。

ストーリーの構成にあたっては、要所要所において見所を設けます。ところが見所を設け過ぎ、眼の置き所に苦慮する庭園も存在します。常にクライマックスばかりを迎えている庭園であります。一方、何の見せ場もなくストーリーを終えてしまう庭園も存在します。その多くの場合、「綺麗な櫻だったね。」等と云ったストーリーそのものからはおよそほど遠い回答しか得る事が出来ません。

この様にストーリーを授受する上において視覚は格好の媒体となり得ます。(少々デザインから視覚へテーマをすりかえた感も否めませんが。)

7. デザインとは ～実際編～

本来庭園を創造する際におけるデザイン、スタイルに決まり事はありません。自由です。人に慶んで頂く為の手法は様々である訳です。

ところが作庭記や築山庭造伝(前編・後編)といった作庭におけるマニュアルは存在し、現在においてもそれ等を崇拝する傾向は残っています。

この様なマニュアルの中には親切なのか、有難迷惑なのか、非常に事細かく記されたものも存在します。真行草それぞれにおける地割りを設定する。さらには石及び樹木の一つ一つに至るまでその配置を指定し、それぞれに名前までを付けてみる。守護石、不動石、水分石、正真木、寂然木、夕陽木。この様なものみに捕らわれる事は危険ですが、これ等は明らかに人の視線を意識したものであり、視線を誘導しようとするものであります。

その様な中において例えば滝見石。最も美しく滝を拝める位置、角度に据えられている石があります。その石の上からの視線を最も意識して創り手は滝を組む訳です。

例えば舟着石。文字通り舟に乗る為の足掛かりとなる石です。実際池に舟が浮かぶ事が無い場合においても、その石によって情景を思い描く事が可能となる訳です。

同じ様に池に面し据えられる石であっても、それぞれの果たす役割は異なります。方や滝への、方や舟への最良のビューポイントとなり得る訳です。

8. 日本庭園とは ～宿泊施設編～

宿泊施設のお庭。そのスペシャリストの皆様の前で私が大きな事を言える立場ではありません。ですが、集中砲火を浴びる事を覚悟で、私の主観を述べさせていただきます。ここから私はサンドバックになります。

宿泊施設のお庭、そのバリエーションは多様です。立地条件一つとっても都市型のものとりゾート型のものとはお庭の存在意義自体も変容してきます。

失礼な発想かもしれませんが、都市にあるか、郊外にあるか、秘境にあるかによりお庭の果たす役割は異なってきます。

都市と郊外では占有出来る土地の広さも変わってきます。気象条件の違いにも影響されます。しかし決定的な相違はやはり自然に対する想いです。自然に対する憧れ方です。

車で何時間か走らねば山や川に触れる事が出来ない都会と、家の窓から山々を臨める郊外とでは憧れる自然の象徴が異なります。表現されるお庭が異なります。

宿泊施設の場合の状況はもっと特異であるはずですが。

土地柄のみならず様々な条件により相違があります。利用者の求めるものは宿泊なのか、料理なのか、温泉なのか、近くのゴルフ場なのか、オーナーの人柄なのか。一つではない場合が多いでしょう。

お庭の求められているものは意匠的なものだけなのか、機能的なものだけなのか。若しくはその両方なのか。

複合的になればなる程、憧れる自然、表現されるお庭の幅も広がっていきます

9. おもてなしとは ～宿泊施設編～

「如何に慶んで頂けるか、自らも慶べるか。」

今回幾つかの宿泊施設を廻らせてもらったのですが、一つの料理旅館が印象的でした。

お料理は美味しかったです、とても。でも美味しさのコストパフォーマンスを求めるのなら、違う所でお食事をすべきでしょう。

私の興味はお庭にありました。結構心配りの利いたお庭の造りでした。でもお庭のウィークポイントも多々見受けられました。

建物も立派でした。良い感じの書院。一部屋一部屋趣は違いましたし、ナグリのチョウナのかけ方だけでも、ダイナミックなものや緻密なものがあり、楽しめました。

その様な中において、その場になる事自体をを楽しく感じました。トータルの雰囲気心地良く感じました。

どうしてそんな心持になれたかと想うと、人の想いやりを感じ取れたからなのでしょう。

働いてらっしゃる方々の振る舞いから、直接的に心地良さも感じます。

出されたお料理を見ても、一手間、二手間かけたものばかりです。卵を焼くのに小一時間は掛かっているそうです。

お庭も丁寧にお掃除がされています。床の間のお華もお客を迎える毎にチェックしている様です。

お部屋も清潔でした。破れた障子をイチョウ型に取り繕っていたところも懐かしく、微笑ましく想いました。

やはり人の思いやりが一番のおもてなしなのです。人から直接に感じる事もあれば、物を通して間接的にも感じる事もあります。お庭からも感じる事もあります。

今回料理旅館の女将さんにお話を伺ってきました。美しい方だったので楽しくて、かなりの時間お話させてもらいました。

女将さんはおっしゃいます。

「お客、女将を始めとする従業員、お料理。それらが三位一体となってバランスが生まれ、良い空間が生まれる。」

「お客の一言二言から色合いを判断し、自らは無色で接していくと色々なものが見えてくる。」

「女将が偉い訳ではない。仲居は仲居、板前は板前。それぞれがプロ意識を持っている。」

そうなのです。どんなお仕事も同じなのです。

当然、旅館とホテルではそのおもてなしのスタイルも異なります。しかしながら建物にしろ、お庭にしろ、コーヒーにしろ、ベッドメイキングにしろ、込められた思いやりの分だけ、心地良さが生まれる。その様に感じた心地良いひと時でした。

10. デザインとは ～宿泊施設編～

デザインに関しては先程より視線の誘導に纏わってお話をさせて頂いています。

宿泊施設の日本庭園において、特に京都においてはストーリーが崩れているお庭を多々見受けます。今となっては視線はおかしなところにしか誘導されないお庭が多々あります。

これは次の様な事に起因しています。

ホテル等の宿泊施設の中において、良いお庭があるとされているもの。その殆どはお庭自体にストーリーを失っています。

どうしてなのでしょう。それはお庭のオーナーが変わったからです。お庭がそれまで果たしていた役目とは違った役目を背負わされたからです。

京都において、良いお庭とされているものの多くはかつて個人の所有であったものです。

例えば国際ホテル、都ホテル、平安会館、洛翠、白河院。いずれもかつては一人の人の慶びだけを追及していました。

この方へここから見て頂きたい、そう想いを込めたビューポイントが用意されていました。

ところが時代は移ります。オーナーは変わります。敷地の大きさやその他の条件から宿泊施設に生まれ変わる事もあります。

そこからお庭のストーリーは崩れ始めます。建物は全て取り壊され、大きな改修を受ける事となります。

その様な中においてお庭についてはその見た目だけを重宝がられます。しかしながら大きな庭をそのまま残すといったパターンは稀であります。

インパクトのある池や滝組だけを無理やり残す。池もその一部を寸断して切り取る様に残す。

または建物を新たに建てる上で都合のよい部分だけを残す。

いずれのパターンも見た目だけを取り繕おうとしているだけなのです。お庭のストーリーは失われてしまうのにもかかわらず。

このお部屋からこの樹の枝を透かしてあの池を眺めてもらいたい。灯笼の火袋はこの入口の足元を照らし、この蹲いで手を清めお部屋に入ってもらいたい。この橋を渡りながら振り返ると家族が縁側から手を振っている。この滝は間近から見ても、滝見石から見ても、建物のお二階から見ても素敵なのだ。……。色々なビューポイントがあった訳です。

お庭の一部を取り残し、周りに新たな建物を建てた時。お庭の崩れたストーリーを新たなストーリーに書き換える必要があります。

何もお庭を全て壊せという事ではありません。そのお庭を受け継ぐ事に慶びを見出し、それまでの慶びに自らの慶びを重ねなければなりません。

ビューポイントに合わせ、樹木、石の振り（角度）や高さを変えてみたり。歩きやすく飛び石を打ち変えてみたり。

新たなビューポイントを造らねばなりません。新たな慶びを求めなければなりません。私はそう想います。

ただでさえ取り巻く環境は激変しているのです。個人のためのものが、公に近いものとなり。借景と呼ばれていた山も見えなくなり。以前の日本家屋がスタイリッシュなものとなり。

そういった諸条件に対応していかなければなりません。お庭を保存していると言った場合、上辺だけのものをよく目にします。しっかりと現在の慶びを見出さねばなりません。

一方、お客の視線をしっかりと意識してストーリー建てられた宿泊施設においては色々な角度からの楽しみを見出せます。

お部屋において座った人の視線は斜め下を向きます。斜め上から視線を誘導しても最終的には斜め下に落ち着きます。部屋それぞれにおいてその位置にお庭のストーリーを設けます。

いざお庭の外に出てみるとそれぞれの部屋のそれぞれのストーリーは繋がって全体のストーリーとなります。視線は斜め下から斜め上へ。そしてまた下へ。

ポイントとなるものやランドマークとなるものを追って。また水の流れや飛び石の配置を追って、視線は上下左右に誘導されます。この視線の動きは空間のスケールの大きさを醸し出します。

優れたお庭には幾つものストーリーを感じ取れるわけです。

ただプライベートなお庭と宿泊施設のお庭との間には決定的な相違があります。それはお庭の表裏です。プライベートなお庭には存在するお庭の表裏を宿泊施設のお庭において眼にする事は稀です。

何も表が良くて裏が悪いという事ではありません。私は樹木のお手入れ一つを取っても表裏を設けます。陰陽の発想なのでしょう。

裏、陰は表、陽を引き立てます。表、陽は目立った部分ではありますが、裏、陰は生活に近い部分、身近な部分といえます。

具体的にいえば、勝手口から見えるお庭や、お手洗いの窓から見えるお庭。プライベートに近付けば近づくほど、裏、陰の部分といえるでしょう。当然例外もありますが。

しかしそれらは決してネガティブなものではありません。表、陽の部分とはまた異なった角度からのビューポイントであり、生活に密接したものであります。

プライベートガーデンの特徴である裏、陰の部分。これが宿泊施設等、商業ベースのお庭には見受けられません。実際存在してもお客が触れる事はありません。

多くの場合、そういったお庭はどこから見ても表、陽の顔をしています。八方美人的にお庭は造られます。色んな表情を持っていても表の顔をしている。

そんなお庭。よく出来ているものはトータルのストーリーも保たれ、お庭に出て散策してもストーリーが成立しています。しかしながら一つ一つのお部屋に表、陽の顔を向けてしまった結果、お庭トータルの存在をおろそかにしてしまうケースもあり得ます。そういった場合お庭の真ん中に裏、陰が来てしまったりする場合も見受けられます。

加えて滝についても触れさせて下さい。

水とはお庭に動きを与えるものです。水を用いるか否かによってお庭の表現の幅は大きく異なります。

逆にいってしまえばただの壁面に水が流れているだけで動きが生まれるのです。それ程水は偉大なものです。

水は視覚のみならず聴覚にも訴え掛けて来ます。(もちろん味覚や嗅覚にも訴え掛けて来

ます。)心地よく水の流れる音は安らぎを与えてくれます。水琴窟、シシオドシ、水車、水を利用した装置もありますが、雨音を聞いているだけでもしっとりとした心になれます。

そんな中において宿泊施設に特徴的なものが滝であります。狭い奥行きであっても空間いっぱいを利用する事が出来ます。

水の流れは縦の流れなので色々な場所から見上げてもお庭の主役を見ている事となります。

滝は荒々しくにも、穏やかにも表現出来ます。自然的にも造形的にも表現出来ます。

ラウンジでコーヒーを飲むお客さんは、何時間も滝を見つめている訳ではありません。ほんの一時触れる滝の流れは、心の疲れを洗い流してくれるのかもしれない。

11. さいごに

色々とお聞き苦しい話だったかと想います。如何に慶んで頂けるか、自らも慶べるか。お庭を通じて今後もそのテーマを楽しませて頂きたいと考えています。有難うございました。

(2002年3月9日、もてなし文化研究会講演に基づく)